

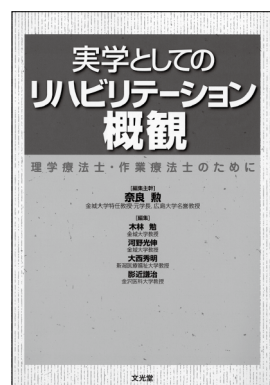
書評

奈良 勲(編集主幹)
木林 勉・河野光伸・大西秀明・影近謙治(編集)

実学としてのリハビリテーション概観 理学療法士・作業療法士のために

評者 岡西哲夫

(名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科教授)



「リハビリテーション概論」とはどのような科目なのかを考える前提として、概論の意味をはっきりとすることが必要となる。なぜなら概論という言葉には二つの意味があるからである。一つは一般的概括的な知識を与えるものとしての概論であり、いま一つ別の意味は、「哲学」という意味があるという。澤瀉久敏(医学概論の創始者)は、医学概論は、医学の哲学(学問)として体系づけられるべきだと説いている。そうだとすれば、リハビリテーション概論も学問として、リハビリテーションとは何かを問い、チーム医療を基本とする各専門職の役割や、近未来における課題と展望について体系づけられた書籍を必要とするであろう。しかし、そのような書籍はこれまで見当たらなかった。おそらく、そのような書籍を出版するには、チーム医療に基づく職種間連携を必須とするからであろう。

このたび、このような困難を乗り越えて、時代の要請に応えるように、『実学としてのリハビリテーション概観』が発刊された。本書の最大の特徴は、それぞれの専門職が各分野の歴史と概要、役割と対象者、業務などについて記述・解説することによって、領域は重なっても果たしている役割は異なるという、医師、影近氏が、最も新しいモデルと紹介する「職種協業モデル(transdisciplinary model)」が、まさに一冊の書籍の中で実現されていることである。それは丁度、

オーケストラが美しく統一されて演奏しているように心に響いてくる。

本書の編集主幹である奈良勲氏は、リハビリテーション(Rehabilitation)の基本語はハビリテーション(habilitation)であると明言している。このような基本用語や概念、定義は、それぞれの分野の基盤をなす。これらの意味を適確に知ることなしに学問体系は成り立たない。一方、看護の概念にリハビリテーションの目的・目標が内在化しているというエピソードは、本書ならではの必読といえる。綿密なチーム医療の遂行は、常に各専門職のルーツを歴史的に概観し、その役割を理解し尊敬することに始まる。概論ではなく概観としたのは、きっと、そのような意味からだと思う。

本書は、授業のコマ数を意識して14項目とコラムから構成され、また、予習や復習のために「学習目標」と「押さえておきたい要点」を設け、卒後のためにFurther Readingも紹介している。本書が、卒前卒後を通じて多くの療法士に愛読され、各現場で、より綿密なチーム医療が遂行されていくことを期待したい。

● B5判・196頁・2色刷

定価 3,240 円(本体 3,000 円)

文光堂刊、2015 年